

平成二十五年八月十日発行
皇學館論叢第四十六卷第四号
抜刷

紹介

『続・田中卓著作集』第六卷に寄せて

荊
木
美
行

『続・田中卓著作集』第六巻に寄せて

荊 木 美 行

皇學館大学元学長田中卓博士（以下、「著者」と称する）の還暦を記念して企画された『田中卓著作集』全十一巻（当初は、全十一冊の予定であったが、のちに第十一巻が二分冊となり、全十二冊となった）の刊行が始まったのは、昭和六十年（一九八五）四月。第一回配本は、第三巻『邪馬台国と稲荷山鉄刀銘』であった。

『田中卓著作集』は、刊行初年の昭和六十年（一九八五）には四冊（第三巻『邪馬台国と稲荷山鉄刀銘』・第四巻『伊勢神宮の創祀と発展』・第五巻『壬申の乱とその前後』・第七巻『住吉大社神代記の研究』）、翌六十一年（一九八六）には二冊（第六巻『律令制の諸問題』・第二巻『日本国家の成立と諸氏族』）、

と順調な滑りだしをみせたが、その後は、昭和六十二年（一九八七）に一冊（第一巻『神話と史実』）、昭和六十三年（一九八八）にも一冊（第八巻『出雲国風土記の研究』）としたに冊数が減少し、平成五年に第十巻『古典籍と史料』が刊行されるまでは、四年ものあいだ刊行が杜絶していた。しかし、途中の故障や紆余曲折を乗り越え、刊行開始から十三年の歳月をかけて、平成十年（一九九八）七月、最終回配本の第十一巻―Ⅱ『私の古代史像』の刊行をもって、ようやく全巻が完了した。著者の論文のなかには、雑誌、それも一般には入手しがたいものに掲載されたまま、その後論文集にも再録されることのなかったものが少なくない。こうした披見の困難な論文

を、未発表の論文・資料などとあわせて集大成した著者の著作集は研究者の共有財産として、その後大いに学界を裨益した。

その著作集の完結から十三年。このたび、著者の米寿を記念して『続・田中卓著作集』が（以下、「本著作集」と称する）企画・出版される運びとなった。第一回配本として第一巻『伊勢・三輪・賀茂・出雲の神々』が出版されたのが、平成二十三年十二月。その後、およそ三カ月に一冊のペースで刊行が進み、ここに全六巻が完結した。念のため、各巻の題目と刊行年月を掲げておくと、つぎのとおりである。

第一巻 『伊勢・三輪・賀茂・出雲の神々』四百十二頁（平成二十三年十二月刊）

第二巻 『古代の住吉大社』四百七十六頁（平成二十四年三月刊）

第三巻 『考古学・上代史料の再検討』二百三十六頁（平成二十四年六月刊）

第四巻 『日本建国史と邪馬台国』三百五十頁（平成二十四年九月刊）

第五巻 『平泉史学の神髄』二百四十四頁（平成二十四年十二月刊）

第六巻 『出陣学徒の終戦史録』四百二十頁（平成二十五年四月刊）

各巻平均三百三十頁にも及ぶ大冊が、かくも順調に刊行され、恙なく全巻の完結をみたことは慶賀に耐えない。本著作集は、書名が示すように、『田中卓著作集』全十一巻十二冊（以下、「正篇」と称する）の続篇である。正篇は続篇の倍の巻数だったとはいえ、全巻完結までに十三年の歳月を要したことを考えると、続篇の配本は驚異的なペースというべきであろう。編輯にかかわったかたがたの労を多としたい。

○

本著作集に収録された論文は、二種に大別することが可能である。すなわち、正篇未収録の比較的新しい論文と、近現代史の史料として貴重な記録や史料のたぐいである。

前者については、本格的な論文もあるが、著者の積年の研究を踏まえた啓蒙的な文章も数多くふくまれている。一例をあげると、第二巻『古代の住吉大社』は、住吉セミナーにおける著者の講演の速記録（住吉大社の社報『すみのえ』に連載）を中心とした一巻で、高いレヴェルの学術的内容が平易な語り口でまとめられている。

また、後者については、著者が師事した平泉澄博士に関する資料や記録を蒐めた第五巻『平泉史学の神髄』や、ここに紹介

する第六卷『出陣学徒の終戦史録』がそれにあたる。本巻は、書名からもわかるように、「大東亜戦争」を体験した若き日の著者の終戦記録を中心に構成されている。

今日次にしたがって、収録原稿を示すと、つぎのとおりである。

自序

※一、海軍経理学校戦闘体制ノ緊急確立ニ関スル献策

※二、終戦始末―占領下に綴る―学徒の手記―

三、日本上古史研究の諸相―『日本上古史研究』編集後

記（昭和三十三年一月―昭和三十八年十二月）

四、古代史セミナー（國民會館）の講義題目―平成元年

五月―平成十五年六月―

※五、著者の略歴（平成六年以降）

※六、『続・著作集』総目次

七、本巻所収の論稿一覧

八、『続・著作集』正誤表（第一―五巻）

※九、『続・著作集』要語索引

本著作集の刊行に先立って配布されたパンフレットの段階で収録が予定されていたのは、※印のものである。企画の変更のなかで注目を惹くのは、二三、日本上古史研究の諸相―『日本上古史研究』編集後記（昭和三十三年一月―昭和三十八年十二

『続・田中卓著作集』第六巻に寄せて（荊木）

月）だが、これについては、のちにあらためてふれるとして、やはり、本巻の真面目は、一・二であろう。総約四百頁の半分がこの二篇で占められており、本著作集のなかではもともと未発表原稿の多い一巻となっている。「自序」によれば、恩師平泉澄博士は、昔の史料に頼り、その恩恵をうける史学者は、過去の研究と同時に、自ら生きた時代に関する体験と知見を史料として書き残す気持ちは忘れるな、と著者に教えたという。本巻収録の諸篇は、かかる恩師の教訓を拳々服膺し、著者が若き日に書き綴ったものである。

「一、海軍経理学校戦闘体制ノ緊急確立ニ関スル献策」は、筆者が昭和二十年（一九四五）に海軍経理学校に着任し、海軍少尉に任ぜられた当時の上司に提出した「本土決戦の具体策」の記録である。世間では「本土決戦」などは掛け声だけだったという軽口が流布しているが、著者によれば、それは具体策を書き記した資料類が「軍極秘」のためすべて焼却されたからだという。「本土決戦」が当時真剣に想定されていた、という実証を些かでも世に知らせておきたいがために、筆者の手に残った下書き草稿を元に鵬刻したのが、本論文である。

つづく「二、終戦始末―占領下に綴る―学徒の手記―」は、本巻中の雄篇で、筆者みずからが体験した「大東亜戦争」当時の伝聞と所感を記録にとどめたものである。この二は、終戦直

後、大阪府立図書館の司書として一年二カ月勤務された著者は、勤務の餘暇に閲覧・筆写しえた時局雑誌などをもとに、執筆された貴重な記録である。その後、数次の改稿を経て手元に残った清書ノートが、このたび六十数年の歳月を経て目の目までみたのである。いずれも、迫真の記録であり、戦争末期、さらには終戦に至る貴重な記録であるが、ただ、この二篇に対する論評は、べつに近現代史の専門家で適任のかたがおられると思うので、ここでは深く立ち入らなくておく。

○

それよりも、むしろ、評者の注意を惹いたのは、当初は収録の予定ではなかった「三、日本上古史研究の諸相―『日本上古史研究』編集後記（昭和三十三年一月～昭和三十八年十二月）」である。

これは、筆者が、昭和三十三年（一九五七）に独力で創刊し、昭和三十三年（一九六四）の終刊に至るまで約九十冊（増刊号もふくむ）を送り出した古代・上代史の専門学術誌『日本上古史研究』の巻末に毎号附された「編輯後記」である。著者は、「自序」において「これをご覧いただければ、敗戦後の昭和三十三年から七年間の上古史研究学術界の素顔が垣間見られるで

あらう」とのべておられるとおり、短文ながら、当時の古代史学界の雰囲気をよく伝えている。

ご承知のかたもおられると思うが、この『日本上古史研究』は、昭和六十二年（一九八七）に名著普及会からリプリントで合冊覆刻版（全七巻）が刊行されている。大家から新進に至るまで多彩な研究者が斬新な論文を寄せた、貴重な雑誌だけあって、この覆刻版は好評をもって学界に迎えられ、重版までされた。雑誌の合本・覆刻自体は戦後珍しいことではないが、覆刻版の再版が出たのは、あまり例を聞かない。

ちなみに、本巻にはなぜか再録されていないが、名著普及会の覆刻版の第一分冊の巻頭には昭和五十四年（一九七九）十一月に書かれた「覆刻に際して」という著者の文章が掲げられている。これも、貴重な記録なので、ここにその全文を掲げておきたい。

光陰矢のごとし、とは良く言つたもので、『日本上古史研究』が企画された時から既に二十年以上の歳月が流れた。創刊号は昭和三十三年一月であるから、当時、私は十三歳になつたばかりの若輩であつたが、期するところあつて、日本上古史研究会を設立し、本誌の発刊に踏み切つた。

勿論、当初は、私自身が本会の代表者になるなどといふ

大それた気持は毛頭なかつた。大学時代の恩師坂本太郎先生を代表にいただき、私は編輯事務を担当する予定であつたが、先生に御願ひを兼ねて御相談にあがつたところ、実際に万事貴君が運営するのであるから、若いからと遠慮などせず、貴君自身が代表者となつてやり給へ、協力はしませう、と激励された。そこで已むを得ず、私は「代表者」でなく、「責任者」と名乗つて本誌を主宰することとなつた。

従つて「編輯後記」は第七巻の一部を除いて毎号私が執筆した。編輯委員は、私の他に吉井良隆・生沢英太郎・二宮正彦の諸氏。その頃、私の一家は戦災で家を失ひ、大阪社会事業短期大学の学寮に寄寓してゐたので、その一部屋を研究室に転用し、若い数名の人々と一緒に「古典会」と称する演習を毎週木曜日に開いてゐた。委員の三氏はそのメンバーであり、古典会の終了後、編輯会議で夜を更かしめたものだ。

私は、雑誌は月刊、を持論とする。特に学問の世界は公正を批判論争によつて向上すると信じてゐるので、忘れた頃に次号が発刊されるやうな雑誌を好まない。かつて井上薫・直木孝次郎・岸俊男の三氏と共に計つて続日本紀研究会を創設（当初の会場はやはり私の研究室）し、その機関

『続・田中卓著作集』第六巻に寄せて（荊木）

誌として『続日本紀研究』（昭和二十九年一月創刊）を発行した際も、私は月刊を特に主張して諸氏の御同意を得た経験がある。

そこで『日本上古史研究』も、最初から月刊で発足した。はじめタイプ印刷のつもりが、予約募集の段階で会員三百名を越えたので急遽活版印刷に改め、京都の内外印刷株式会社（担当、伊藤英夫氏）に特別のお世話になつた。経理面では、誌代を時価最高としたのに会員の積極的な協力を得たことと、やがて吉川弘文館と至文堂の広告による協賛に助けられて、最後まで順調に運用することが出来た。

しかし何より有難かつたのは、この無名の小誌に大家新進百二十名におよぶ執筆者が貴重な原稿を寄せて下さつた御芳情である。いま執筆一覧を通観すると、その当時、学窓出たての若い執筆者で今は錚々たる第一線の学者に大成された方々が尠くない。

また本誌の特色であつた「論文要目」の作製は、当時の東京大学大学院生飯田瑞穂氏（現、中央大学教授、関西大学大学院生二宮正彦氏（現、生国魂神社宮司）が担当してくれられた。その他、陰に陽に御協力を賜はつた多くの方々に改めて厚く御礼を申しあげると共に、私事ながら、封筒の宛名印刷や発送などの雑務を私と二人で夜遅くまで

手伝つてくれた家内にも感謝したい。

本誌は学界の好評を博し、七年間、一度の休刊も遅刊もなく発刊された。しかし六年目の昭和三十七年四月、私は再興された皇学館大学に転勤、翌年春には自宅も伊勢に移つたので、発行所は伊勢、編輯は大阪、印刷は京都となり、事務が輻輳した。加へて私が日本教師会の会長に就任（昭和三十八年二月）して時務に奔走する身となつたため、遂に本誌の継続が困難に陥り、この年末を以つて廃刊となつた。この点、その当時の寄稿者および会員諸氏の御期待にそむいたことを、改めてお詫びしなければならない。

爾来、十有六年、近頃、本誌は古書目録で十数万円と評価され、若い研究者の間に本誌の覆刻を求める声が多く聞かれるやうになつたので、今回、小関貴久社長の御好意で名著普及会から原形のまま合本七巻として刊行されることとなつた。

私にとつては愛児が甦る思ひであるが、同時に、これを機会に、構想を新たにして更に学界に貢献するための一里塚にしたいと思ふ。

今回、この『日本上古史研究』の「編輯後記」が急遽再録されることになつたのは慶ぶべきことである。雑誌の「編輯後記」など、本著作集の他の論文・資料と比較すれば、文字通り

の断簡零墨ではあるが、短文ゆえに、著者の率直な心情が吐露されている箇所も少なくなく、滋味溢れる掌篇である。評者も、若いころ、名著普及会版でこの「編輯後記」を興味深く拝読した一人であり、このたびの再録には快哉を叫びたい心持ちである。

ただ、本巻を目堵した際に頭を過つたのは、雑誌の原本を手に取ることなく、本著作集によつてこの「編輯後記」を読むことに、いったいどれだけの意味があるかということである。端的にいえば、著作集の紙面からは、この「編輯後記」が書かれた時代の雰囲気というものが伝わってこないものである。理窟っぽい言い方だが、「編輯後記」などというものは、雑誌の巻末に位置してこそ、その意味があるのであつて、著作集に収められた「編輯後記」は、言ってみれば、博物館の美麗な陳列棚に収納された仏像のようなものである。むろん、仏像は、寺院で拝観しても、博物館で観覧してもありがたみは同じであろうが、やはり、それがあるべき場所と雰囲気というものは重要な要素である。これは、評者がこの「編輯後記」にはじめてふれた覆刻版にもいえることであつて、ほんとうの『日本上古史研究』の雰囲気味わおうとすれば、やはり、雑誌原本を入手するほかないのである。評者は、さいわい、のちにほぼ全冊完備した原本を手に入れたが、表紙の色合い（覆刻版は単色だが、

原本は表紙のみ色刷り)、こんにちからみればけつして上等とはいえない紙質、活版印刷ならではの仕上がりが、など、また印象が異なるのであって、自身経験したことのない刊行当時の様子が彷彿とするのである(こんにちの学術雑誌に馴れているかたからみれば、吉川弘文館のPR誌『本郷』より薄い『日本上古史研究』に驚かれるであろう)。

電子書籍やいわゆる「自炊」行為が幅を利かせる昨今、内容さえわかれば版は問わないという合理的読書人も多いであろう。しかし、たとえば、漱石研究者は、漱石の作品が書かれた時代の匂いを嗅ぎ取ろうと、『ころ』や『明暗』の初版本をもとめるといふ。これと同様に、学術雑誌においても、その論文を生んだ時代の雰囲気把握することも論文を読む際には重要な要素ではあるまいか。このたびの著作集で『日本上古史研究』に興味を抱かれた若手研究者がおられれば、それで満足することなく、ぜひいちど原本を手に取り、当時の雑誌のなかにおかれた「編輯後記」を味わっていただきたいと思う。

そういうえば、『日本上古史研究』同様、著者が創刊に関与された『続日本紀研究』(前掲「覆刻に際して」参照)がまもなく、創刊四百号を迎える。仄聞するところでは、記念事業としてバックナンバーをPDFファイルの形で覆刻・頒布するといふ。著大な雑誌だが、バックナンバーを完備していない研究機

関や個人研究者も少なくないであろうから、この企画は学界を裨益するところ大である。ただ、贅沢をいえば、『日本上古史研究』の場合と同じく、PDF形式ではもはや原本の面影は体感したい。周知のように、『続日本紀研究』は初期には謄写版印刷を採用、やがてタイプ印刷へ切り替え、最近になってようやく電算写植による組版へと変化した。なかでも、昭和三十年代の謄写版印刷は、その紙質ともあいまって、戦後の古代史研究の発展期に向かう息吹のようなものを感じる。研究者がこれを体感することも、歴史研究の一環ではないかと、個人的感想を抱く次第である。

○

なお、評者は、著者の研究から蒙った恩顧に報いたいと思い、本著作集の正篇については、刊行のつと、なるべく紹介・書評の筆を執ってきた。具体的には、①『田中卓著作集』全十一卷(十二冊)を読む」(『藝林』四八一、藝林会、平成十一年一月)において全体的な得失を論評したほか、個別には、②「紹介と解説『田中卓著作集』第十卷」(『皇學館論叢』二六―五、皇學館大学人文学会、平成五年十月)・③「田中卓著『新撰姓氏録の研究』」(同上二九―六、平成八年四月)・④「田中卓著

作集』第11—1卷」(同上二八一—、平成七年二月)でも第九卷・第11—1卷の二冊を取り上げたことがあるし、これに関連するものとして、⑤「田中卓評論集3『祖国再建』(建国史を解く正統史学)を読む」(『藝林』五六—一、藝林会、平成十九年四月)という書評も執筆している。

これらのうち、②は「田中卓著『古典籍と史料』について」と改題して拙著『古代史研究と古典籍』(皇學館大学出版部、平成八年九月)に、また、①・③・④についてはいずれも拙著『記紀と古代史料の研究』(国書刊行会、平成二十年二月)の第Ⅲ篇「学史上の人々とその著作」に収録したので(②は「田中卓博士の氏族系譜研究—『新撰姓氏録の研究』の刊行に寄せて—」、③は「田中卓博士の神道史研究—『田中卓著作集』第11—1巻を読んで—」と改題)、ご参照たまわれれば幸いです。

(いばらき・よしゆき 研究開発推進センター教授)

(国書刊行会刊、平成二十五年四月発行、

A5判四百二十頁、本体価格九〇〇〇円)